

担い手通信

2026
vol. 5

イネカメムシ対策

作期異なる水稻で一斉防除するなら 熟期早い品種基準に

滋賀県病害虫防除所は、水稻で作期の異なる品種を栽培して一斉防除をする場合、イネカメムシによる不稔（ふねん）被害を防ぐには、熟期が最も早い品種に注目して出穂期に防除するのがよいことを確かめました。それでも多発する場合、出穂7～10日後の乳熟期に追加防除をします。作期分散で複数品種の作付けが進む中、防除適期の判断に役立てられるとされます。

甲賀市の農業法人と協力し、熟期の違う「みずかがみ」「キヌヒカリ」「きぬむすめ」の3品種を近接した水田で栽培。慣行の薬剤防除をして、イネカメムシ=虫の被害と考えられる不稔穂の発生割合を調べました。結果、どの品種でもイネカメムシは確認され、不稔被害が最も少なかったのは熟期が中間の「キヌヒカリ」で、最も多かったのは熟期が早い「みずかがみ」でした。成虫・幼虫数が最も多かったのは熟期が遅い「きぬむすめ」でした。

越冬成虫は水田飛来後に卵巣を発達させることなどから、熟期が遅く被害が多かった「きぬむすめ」は、他の2品種で増えた成虫が飛来した可能性があるといいます。熟期が中間の「キヌヒカリ」で被害が少なかったのは、出穂直後の柔らかい稻が幼虫の餌に適しているとすると、条件に合致した「きぬむすめ」が近距離に存在したことなどが要因として考えられました。

このため同防除所は、作期を通じてイネカメムシの増殖と飛来を抑えるには、熟期が早い品種の出穂期の防除を基本に考えるのが効果的としました。それでも抑えられなければ追加防除を検討します。

イネカメムシが全国的に拡大する要因の一つに、担い手の規模拡大で作期分散が進み、餌となる稻が長期間に存在することが指摘されています。現実的には、品種を統一したり防除回数を増やしたりするのは難しく、同防除所は、できるだけ少ない回数で被害を抑える方法を調べました。

イネカメムシ防除は、 最も早い品種の出穂期が効果的



ことば イネカメムシ

斑点米カメムシ類の一一種。斑点米を生じさせて商品価値を下げ、もみが実らない不稔被害ももたらす。大型種で特に稻を好み、水田に直接飛来する。薬剤散布防除が基本となる。

(日本農業新聞 2025年11月17日)